

高調し信仰に由て宗教生活の神髓に徹底せる基督者たる時代に到る迄彼は道徳的に熱誠なる人物であつた。彼が舊き生活も新なる生活も品性を基礎となす生活であつた。彼は理性を尊みたると共に意思を重んじ神學者たると共に信仰家であつた。故に彼は深遠なる神學的智識と共に實際的なる道徳的行爲を重んじた。彼の倫理思想のみならず基督教の教理に於ても實踐的要素が多かつた。彼は初代教會のソクラテスにして智識と實行の兩立を力説した。彼は新生活に入てより基督の精神を體得した。彼は愛を衆徳の基礎となし愛が諸方面に活動する處に個人道徳、社會道徳の圓滿なる運用あることを認めた。彼は愛の本源を神に歸し天父の愛の顯現の極致を基督の人格に發見し人の善行美徳は神の靈の指導と基督の人格の感化より來ることを主張した。基督が神と人との父子的關係と人類相互の兄弟的關係とを倫理思想の根柢となし給ひし如く保羅は人間相互の關係を有機的に認め人類社會に對して實に近世的思想を有して居た。彼は基督教道徳の神髓を倫理學者又は哲學者として論究したるにあらす彼は之を徳行家として實踐し「我が基督に倣ふ如く汝等亦我に倣ふべし」と語つた。更に彼は人格の尊嚴、個人の價値、家庭の神聖、資本家と勞働者との關係等に就て周到にして精細なる人道的見解を與へた。彼は實に宗教生活と倫理生活との調和を高調し信仰生活と現實生活との一致を尊重した。彼が熱誠を披瀝したる幾多の書翰を讀む者は何人も彼の筆端が常に道徳的調子に充滿せることを認めざるを得ないのである。彼は基督者の個人的又は社會的生活に於て正義、仁愛、純潔、謙遜、忍耐、克己、勤儉、良善、忠信等の諸徳を實行すべきことを教訓し彼自らは是が實現の爲に競技を演じつゝある

己、勤儉、良善、忠信等の諸徳を實行すべきことを教訓し彼自らは是が實現の爲に競技を演じつゝある選手の如くに感じ徳義の戰場に奮闘して人格の榮冠を戴くことを無上の光榮となす勇士の如くに信じて居た。彼は自ら聖善の君子たることを理想となし、理想的な人格なる基督に充實する徳光と同化せんことを努めたるのみならず總ての基督者をして基督の人格と同化せしむるために慘憺たる苦心をなした。初代教會の歴史に於て謹直なるヤコブが居た。熱烈なるペテロが居た。慈愛に富めるヨハネが居た。然かも保羅は彼等の長處を一身に具備したる徳行家であつた。

第五 保羅は非凡なる靈的天才であつた

保羅の生涯を研究して看過すること能はざる一大事實は彼が幽玄奧妙なる靈界の實在に對する感應の纖巧にして確信の鮮明なりしことである。彼が生涯の轉機なりしダマスコ途上に於ける新生活の實驗を始となし彼が終世基督と常住不離の靈的交通をなし、更に彼が榮光の燦然たる他界の生活に對し美麗にして鮮明なる思想を抱きたるが如き、彼は空間と時間とを超越したる信仰的洞觀と靈的の直覺とを有した。彼には預言者の如き靈敏たる靈覺があつた。彼には詩的趣味が豊富であつた。彼には鋭敏なる靈覺ありしが故に靈界の事實を物界の事實よりも明確に認識した。彼には清新なる感興が横溢したるが故に見えざる世界の消息を見ゆる世界の消息の如く實驗した。彼には信仰の基督と歴史の基督とが同一であつた。彼には主觀的現象と客觀的現象とを識別し難き程に靈的の感應が纖巧であつた。彼

と基督とは思想に於ても生活に於ても神會融合して居た。彼が基督と同化したる靈的實驗は彼が基督なか基督が彼なるか區別し難き程に彼は基督の内に生き基督は彼の内に生き給ふた。此驚異に堪へられざる靈的の實驗は靈的の感興の鬱勃として宗教的受感性の纖巧美妙なる靈的天才にあらずんば觀ること能はざる實驗であつた。是れ實に保羅が神秘的信仰生活の妙趣に徹底したる所以である。此神秘的實驗は基督者の生活に於ける歡天喜地の境界である。靈的歡喜の絶頂である。教理、倫理、儀式、信條を超絶したる神人合一の妙境である。保羅は此靈的天才に由て基督に接觸し活ける基督と親交し彼の基督觀を得たのであつた。

第六 保羅は聖者的人物であつた

保羅は絶對の善なる神に愛護せられて特別に神の召命を蒙り救主基督を信すること由て聖化せられたる者を聖者と唱へたる如く彼自らも神の無限なる恩寵に沐浴し神より選ばれ救はれ召されたる者としての特權を與へられ基督の贖罪に信頼し感激し献身して罪惡の舊生涯を脱却し正義なる新生活に勇往し自己中心の生活を捨て、基督中心の主義に向上し座臥常住、基督の心を體得し其榮光を顯彰することを最高の歡喜となす純潔なる信仰生活に入つた。彼は此點に於て常に道德家、君子、天才なりしのみならず神の前に立てる聖者的人物であつた。彼は此神靈に由て指導せらるる、聖者的人格を以て基督の教會の會員の最高資格なりと考へた。而して保羅の實驗に由れば此聖者的生活は自力と奮闘とを主眼

となす克己修養に由てのみ得らるるものではなかつた。是れ他力と信頼の祝福にして神の恩惠の賜物であつた。自力の無能なるに絶望したる者が他力の全能力に由て希望を得るのであつた。奮闘の勇氣沮喪したる者が信頼の妙力に由て元氣百倍するのであつた。克己すること能はざる者が神の恩惠に由て自ら克己せんとするにあらずして神の恩惠に感激して神より克己し得る神秘力を與へらるるのであつた。自ら修養の猛志なきものが自ら修養せんとするにあらずして神の恩惠に由て神より修養し得る自我以上の靈力を與へらるるのであつた。神の無限なる慈愛、神の無量なる恩惠、神の自由なる祝福、神の普遍なる守護、神の超自然的なる佑助は神に信頼し基督に献身する者をして天真に爛燦に自由に靈活に聖者とならしむるのであつた。

保羅は此の恩惠の生活に憧がれて非凡の奮闘家となり修養家となり克己家となり努力家となつた。しかし是は彼が自我の力ではなかつた神の力であつた。神の自由なる恩惠であつた。彼は斯くして人生の富貴や權勢や榮譽や快樂や恰も雲煙泡沫の如き現世の物質的生活より超然として清警孤高、脱塵超俗、專念一意神命に従順に基督に忠誠に永遠不朽の生命を渴仰し絶對無限の神恩に愛護せられ地上に在て天上の聖者の面影を偲はしむるのであつた。彼は福音の宣傳と同胞の救済とに熱中して寢食を忘れた。彼は苦樂成敗を度外視して常に神と基督との恩惠に報いんことを努めた。彼が足跡の印する處には迫害と苦難とが伴ふて居た。しかも彼は不撓不屈の精神を以て信仰の戰場に立て勇進健闘した。彼は傳

道するに當て謙遜、慈愛、忍耐、犠牲に満されて居た。彼は祈禱、熱涙、赤誠を以て同胞に對した。彼は決死的意氣と殉教的精神とを以て勇往邁進した、彼は遂に彼の信仰の爲めに殉教の碧血を流し彼の感化をして千載不磨のものとならしめた。然かも此等は總て神の恩恵であつた。他方信頼の祝福であつた。保羅は神の自由なる恩恵に由て聖者の生活に徹底したのである。

第七 保羅は熱烈なる同情の人であつた

保羅は基督者となりたる前より熱情の人であつた。彼は猶太教徒として基督者を迫害する程に熱烈であつた。彼の熱情多感なる性質は基督の春風の如き温情に觸れ又基督の愛献の精神に同化せられて愛の教師となり同情の使徒となつた。彼の愛の歌なるコリント前書十三章を始め彼の書翰は基督の愛に充實せる甘美なる愛の物語ではないか。彼は基督と同胞とに對し救の福音を宣傳する同情に燃えて居た。彼は時として墮落せし信者に向て憤然として怒ることがあつた。しかし彼の怒は彼の愛情の發露であつた。彼が信仰の友に對する個人的挨拶、彼の祈禱、彼の懇望、彼の切願は柔和にして温順なる彼の心情より天真に現はれたる語である。特別に彼が基督と社會の弱者に對する献身的愛情に充實したることは驚くべきである。彼は救主に生命を献じて愛したる如く彼が救に導きたる基督者の爲に生命を献じて愛した彼は救主の爲に受ける苦難を感謝して受けたる如く彼が救に導きたる基督者の爲に苦難を受ることを歎喜となした。彼は基督に憧憬し彼が愛情の總てを献じたるが如く基督が血を以て救

ひ給ひし基督者を深く愛した。

第八 保羅は剛健なる人であつた

保羅は斯く慈母の如き愛に溢れたるも唯だ女性的の愛に溺るゝ人物ではなかつた。彼は同情の人なりしと共に剛健にして勇敢なる人物であつた。彼は舊生活に於て激烈なる基督教の迫害者なりし如く新生活に於て熱心なる基督教の戰士であつた。彼は異邦人を罪惡の羈絆より自由ならしむる爲に同郷人より迫害せられ彼は福音の眞理に忠誠なる爲に異教の勢力と對抗した。彼は神我を守護し給へば誰か我に敵する者あらんやと絶叫した。又彼は既に信仰の善戦を闘ひ馳すべき道程を馳せ盡し義の榮冠彼を待てることを確信し精神界の戰場に於ける常勝の將軍たるが如き勇氣に充實して居た。彼は智の人にして情の人たり情の人にして意の人であつた。更に彼は身體虚弱にして疾病に惱まれたるも是に勝ち彼は生活の困難に襲はれたるも是より超然たる所があつた。彼が生命を賭して基督の福音を證明したるが如き彼が如何に強固なる意志と不斷の執着力と無盡藏なる精力と不屈の勇氣とを有したるかを知ることが出来る。

保羅は一面に於て柔和、謙遜、忍耐の性格を備へ貧者と弱者とに對しては優しかつた。しかし彼は眞理のため正義のため愛のため基督の救の證明のためには彼の眼中に王公將相と匹夫匹婦との區別がなつた。彼は確信する處を公言して憚からず、王公貴人の前に於ても學者智者の前に於ても基督教の

眞理を證するに當つては殆んど狂熱的であつた。彼の傳道は彼の生命を値し、彼の説教は彼の生死の決する處であつた。彼は眞に良心に對して剛健なる人物であつた。

之を要するに使徒保羅は曾て熱烈なる猶太教徒として律法を嚴格に守ることを以て宗教生活の神髓なりと信じて居た。彼の全力を傾注して猶太教の律法及儀式に服従した。しかし彼の靈的煩悶は十分の慰安を得なかつた。彼が信仰的憧憬は完全に満足せられなかつた。故に彼は猶太教を捨て信仰に由て救はるゝ基督教に入つた。換言すれば彼は自力修行の舊宗教より他力恩惠の新宗教に轉じた彼は基督教に由て顯はされたる神の恩惠に由て彼が内の生活の苦痛に勝つた。彼は曾て自我の努力を以て義人となり神の前に完き生活を送らんとせしが今は無限なる救主の慈愛に感激し愛は總ての律法を完全にすることを實驗した。彼は信仰生活の極致とは基督の自覺と同化し基督の人格と融和する生活なることを實驗した。信仰に由て神に絶對に服従をなし全力を盡して基督の愛を體得する内の生活の自由あり救あり永遠の生活あることを實驗した。彼は救主は選民を以て自任する猶太人を救ひ給ふのみならず普遍的に人類一般の救主なることを確信した。彼は此の確信を以て異邦人の使徒たる自覺を有して居た。彼は是が爲に數へ難き苦痛と悲哀と困難とに堪へ基督教をして猶太の一隅より羅馬帝國の樞要なる地に傳播せしめた。斯くして保羅は基督教の世界に發展する基礎を置いた。

十二使徒の指導者の位置にありしペテロはガリラヤ湖畔の漁夫より起り基督の人格の感化に由て驚べ

き靈的人格となつたが。保羅は學識あり位置あり修養あるパリサイ人にして同じく基督の感化に由て偉大なる人物となつた。保羅はペテロの如く熱血男子であつた。しかし彼はペテロよりも深遠なる智識と論理的腦髓と溫暖なる心情に於て優る處があつた。保羅は智的に優秀なる性格を備へたと共に宗教的情緒鋭敏にして神秘なる信仰生活に徹底した。彼は智的に靈的に又熱誠に於て初代の使徒中に傑出して居た。彼は同時に實際的活動家にして偉大なる建設的事業家であつた。彼は活動的人物なると共に精神高潔にして品行嚴正なる善徳の君子であつた。彼は羅馬帝國を眼中に置き當時の全世界を基督教化する抱負を有すると共に最も小さき信仰の友の消息に深く注意し無名の同胞のために心を勞し思を碎いた。彼は團體としての基督者に滿腔の熱誠を献げたる如く個人に對して懇切なる同情を寄せた。彼は論理的文章に巧妙なると共に高雅流麗なる詩的散文に長じて居た。彼は一字一涙、千歳の下人をして感激せしむる文壇の名士なりしと共に直言正論、熱血淋漓たる講壇の雄將であつた。保羅は實に多趣味にして多方面に卓越したる才能があつた。彼は斯くして基督教を異邦人の間に宣傳し彼の特徴ある人格の力を通して基督教を世界的に紹介した。フライデルは基督を以て民族的思想を脱すること能はざる宗教家となし基督教が世界的宗教として活動し發展したることは使徒保羅の雄大なる思想と信仰と活動の結果なりと評したるが是には一面の眞理ありと言はねばならぬ。保羅の人格は基督教が世界的に發展する時期に於て最も勢力があつたのである。

保羅傳終

附錄

保羅傳の引證

第一章 幼年及青年時代

(一) 保羅の祖先と幼時

使徒行傳 二十一の三十九。二十二の三。二十三の三十四
コリント後書 十一の二十二
ローマ書 十一の一
ピリピ書 三の四、五

(二) 保羅の教育

使徒行傳 二十二の三。二十三の六。二十六の四、五
ガラテヤ書 一の十三、十四
ピリピ書 三の五

(三) 保羅の性格

ピリピ書 三の六

保羅傳の引證

テモテ前書 一の十二、十三
テモテ後書 一の三

第二章 迫害者ソール

- (一) ステバノの死
使徒行傳 七の五十七、五十八。八の一、二。二十二の二十
- (二) ソールの迫害
使徒行傳 八の三、四。二十二の四、五、十九。二十六の九—十一
- (三) 書翰に於ける保羅の告白
コリント前書 十五の九
ガラテヤ書 一の十三、二十二—二十四
ピリピ書 三の六
テモテ前書 一の十三

第三章 保羅の新生活 (紀元三十六年頃か)

- (一) ダマスコの途上
使徒行傳 九の一—九。二十二の五—十一。二十六の十二—二十
- (二) 保羅とアナニヤ
使徒行傳 九の十一—十九。二十二の十二—十六
- (三) 書翰に於ける保羅の新生活
コリント前書 一の九。九の一。十五の七—十
ガラテヤ書 一の十一、十二、十五、十六
ローマ書 一の二—五。七の七—二十五。八の一
エペソ書 三の一—八
ピリピ書 三の十一—十二
テモテ前書 一の十二—十六

第四章 ダマスコミアラビヤ及エルサレム

(紀元三十七年より三十九年頃か)

- (一) ダマスコに於ける保羅
使徒行傳 九の十七—二十二。二十六の十九、二十
- (二) アラビヤとダマスコに於ける保羅
ガラテヤ書 一の十五—十八
使徒行傳 九の二十三—二十六
コリント後書 十二の三十二、三十三
- (三) 保羅のエルサレム行
使徒行傳 九の二十六—二十九。二十二の十五—二十一
ガラテヤ書 一の十七—二十。

第五章 タルソに於ける保羅 (紀元三十九年より四十三年頃迄か)

- (一) エルサレムよりタルソ
使徒行傳 九の二十九、三十
ガラテヤ書 一の二十一と二十四

第六章 バルナバと保羅 (紀元四十四年頃か)

- (一) バルナバの保羅訪問及保羅の幻影
使徒行傳 十一の十九—二十五。
コリント後書 十二の一—四。
- (二) 保羅のアンテオケ滯留
使徒行傳 十一の二十五、二十六。
- (三) 保羅のエルサレム行
使徒行傳 十一の二十七—三十。十二の二十五。

第七章 第一傳道旅行 (紀元四十五年より四十九年頃迄か)

- (一) バルナバと保羅の出發
使徒行傳 十三の一—三。
- (二) ク プ ロ
保羅傳の引證

使 徒 行 傳 十三の四―五

(三) バボス

使 徒 行 傳 十三の六―十二

(四) バンフリヤのベルグ

使 徒 行 傳 十三の十三

(五) ビシデヤのアンテオケ

使 徒 行 傳 十三の十四―四十一

(六) 猶太人の排斥と異邦人の傳道

使 徒 行 傳 十三の四十二―四十九

(七) 保羅の病氣とガラテヤ人の親切

ガラテヤ書 四の十三―十五

(八) アンテオケに於ける迫害

使 徒 行 傳 十三の五十

(九) イコニオム

使 徒 行 傳 十三の五十一、五十二。十四の二―六

(十) ルステラ

使 徒 行 傳 十四の六―二十

コリント後書 十一の二十四、二十五

(十一) デルベ、ルステラ、イコニオム、ビシデヤのアンテオケ、ベルグ

使 徒 行 傳 十四の二十一―二十五

(十二) 第一回傳道旅行に就ての保羅の説明

テモテ後書 三の十、十一

(十三) アンテオケに於けるバルナバと保羅

使 徒 行 傳 十四の二十五―二十八

第八章 エルサレムの宗教會議 (紀元五十年頃か)

(一) 保羅とバルナバの派遣

使 徒 行 傳 十五の一―三

ガラテヤ書 二の一、二

保羅傳の引證

- (二) エルサレム教會の歓迎
使徒行傳 十五の四
- (三) 保羅の内相談
ガラテヤ書 二の二
- (四) 公開の討議
使徒行傳 十五の五
ガラテヤ書 二の三―五
- (五) 會議と其決議
使徒行傳 十五の六―二十九
- (六) バルナバと保羅の使命
ガラテヤ書 二の三―十

第九章 アンテオケに於ける保羅

- (一) バルナバと保羅

使徒行傳 十五の三十一―三十六

- (二) バルナバと保羅の爭論

ガラテヤ書 二の十一―十四

第十章 第二傳道旅行 (紀元五十一年より五十四年頃迄か)

- (一) 保羅とバルナバの分離及シリヤとキリキヤ
使徒行傳 十五の三十六―四十一
- (二) テモテの割禮と教會の條規
使徒行傳 十六の一―五
- (三) フルギヤとガラテヤ
使徒行傳 十六の六
- (四) トロアスに於ける保羅の幻影及ルカ
使徒行傳 十六の六―十一
- (五) ビリビ

保羅傳の引證

使 徒 行 傳 十六の十二

(六) ビリビに於ける保羅の同伴者

ビリビ 書 四の二、三

(七) ルヂヤの改宗と保羅の奇跡

使 徒 行 傳 十六の十三—十五。十六の十六—十八

(八) 獄中の保羅とシラス

使 徒 行 傳 十六の十九—二十四

テサロニケ前書 二の二

ビリビ 書 一の三十

(九) 獄吏の改宗と保羅等の解放

使 徒 行 傳 十六の二十五—四十

(十) テサロニケ

使 徒 行 傳 十七の一—九

(十一) テサロニケ前後書とビリビ書の記事

テサロニケ前書 二の九

テサロニケ後書 三の六—十

ビリビ 書 四の十六

(十二) 保羅の忠誠なる説教

テサロニケ前書 一の九—十。二の一—十二

(十三) テサロニケ人の忠信と愛

テサロニケ前書 一の十一—八。二の十三—十六。四の九十

(十四) ベレヤ

使 徒 行 傳 十七の十一—十三

(十五) 保羅はベレヤを去りシラスとテモテは留れり

使 徒 行 傳 十七の十四

テサロニケ前書 二の十七—二十。三の一—五

(十六) アゼンスに於ける保羅

使 徒 行 傳 十七の十五

テサロニケ前書 三の一、二

(十七) 保羅と猶太人及希臘哲學者

保羅傳の引證

使 徒 行 傳 十七の十六—二十一

(十八) アレオ山上の保羅

使 徒 行 傳 十七の二十二—三十四

(十九) コリントに於ける保羅及アクイラとプリスキラ

使 徒 行 傳 十八の一、二

(二十) 天幕製造者保羅及ビリビ人の補助

使 徒 行 傳 十八の三

コリント前書 九の六—十五

コリント後書 十一の六—十

ビリビ書 四の十五

(二十一) シラスとテモテマケドニヤより歸り保羅

テサロニケ前書(五十二年頃)、同後書(五十三年頃)を記す

使 徒 行 傳 十八の四、五

テサロニケ前書 一の一、三の六

テサロニケ後書 一の一

コリント後書 一の十九

(二十二) クリスボ、ガヨス及ステパノの家族の改宗

使 徒 行 傳 十八の五—八

コリント前書 一の十四—十六。十六の十五

(二十三) 保羅の幻影

使 徒 行 傳 十八の九—十一

(二十四) 保羅とガヨス

使 徒 行 傳 十八の十二—十八

(二十五) コリント、エペソ、カイザリヤ、エルサレム及アンテオケ

使 徒 行 傳 十八の十八—二十三

第十一章 第三傳道旅行

(紀元五十四年より五十八年頃迄か)

(一) ガラテヤとフルギヤに於ける保羅

使 徒 行 傳 十八の二十二、二十三

保羅傳の引證

- (二) エベソに於けるアポロ
使 徒 行 傳 十八の二十四—二十八
- (三) エベソに於ける保羅(約三年間)
使 徒 行 傳 十九の—二十
- (四) コリントに於ける保羅
コリント後書 十三の二
- (五) 保羅エベソにてコリント書を記せりされど此書は今存在せず
コリント前書 五の九
- (六) 保羅マケドニヤ、アカヤを経てエルサレム及ローマに往かんと企つ
使 徒 行 傳 十九の二十一
コリント前書 十六の三—七
- (七) テモテとエラストのマケドニヤ派遣。保羅のエベソ滞在、コリント前書の記述
(五十七年の春頃か)
使 徒 行 傳 十九の二十二
コリント前書 四の十七。十六の十、十一。十六の八、九

- (八) 保羅テトス等をコリントに送り且つエルサレムの貧者の爲に寄附金を募集す
コリント後書 十二の十七、十八。七の十三—十五。八の六
- (九) デメテリオ保羅に反對す
使 徒 行 傳 十九の二十二—四十一
- (十) 保羅のエベソ滞在と彼の同伴者
コリント前書 一の一、十六の十五—十九
- (十一) 保羅の苦難
使 徒 行 傳 二十の十七—十九
コリント前書 十五の三十—三十二
コリント後書 一の八—十一
- (十二) 保羅が三年間の説教
使 徒 行 傳 二十の二十、二十一、二十五—二十七、三十一
- (十三) 保羅の手工的勞作
使 徒 行 傳 二十の三十三—三十五
コリント前書 四の十一、十二

- (十四) エベソよりトロアスとマケドニヤ
使 徒 行 傳 二十の一
コリント後書 二の十二、十三
- (十五) 保羅とテモテ及テトスの吉報
(コリント後書 一の一、七の五―七、十三―十六)
- (十六) マセドニヤに於ける保羅の巡回とエルサレム教會に對する彼等の同情
使 徒 行 傳 二十の一、二
コリント後書 八の一―五
- (十七) テトス、コリントの訪問とコリント後書(紀元五十七年の秋)の記述
コリント後書 八の六―八、十六―二十四、九の一―五
- (十八) 保羅イルリコに往きスペインに傳道せんと企つ
羅 馬 書 十五の十九、二十
コリント後書 十の十五、十六
- (十九) 希臘に於ける保羅
使 徒 行 傳 二十の一―三

- (二十) 書翰に由れる保羅の希臘行
コリント後書 二の一、九の三、四、十二の十四、二十一―二十二、十三の一―三
(紀元五十七年の冬ガラテヤ書記され五十八年の春ローマ書記さる)
- ローマ書 十六の一、二、二十一―二十三
- (二十一) エルサレムに往し後羅馬に到らんとする保羅の計畫
ローマ書 一の八―十六、十五の二十二―二十九
- (二十二) コリントよりエルサレム行
使 徒 行 傳 二十の二、三
ローマ書 十五の二十五―二十七
- (二十三) マケドニヤ、ビリビ、トロアス
使 徒 行 傳 二十の三―十二
- (二十四) トロアスよりミレタス
使 徒 行 傳 二十の十三―十六
- (二十五) エベソの長老に對する保羅の演説
使 徒 行 傳 二十の十七―三十八

ローマ書 十五の三十一—三十二

(二十六) ミレトスよりツロ

使徒行傳 二十一の—one六

(二十七) トレマイ、カイザリヤ、エルサレム

使徒行傳 二十一の七—十六

第十二章 エルサレムに於ける保羅 (紀元五十八年頃か)

(一) 保羅のエルサレム訪問

使徒行傳 二十一の十七—二十六。二十四の十七、十八

(二) 猶太人保羅を捕ふ

使徒行傳 二十一の二十七—三十九。二十六の十九—二十一

(三) 保羅の演説

使徒行傳 二十一の四十。二十二の—one二十一

(四) 羅馬市民權と保羅

使徒行傳 二十二の二十二—二十九

(五) 衆議所の前に於ける保羅の演説

使徒行傳 二十二の三十。二十三の—one九

(六) 城中の保羅

使徒行傳 二十三の十、十一

(七) 猶太人保羅を殺さんと謀る

使徒行傳 二十三の十二—二十二

(八) エルサレムよりカイザリヤ行

使徒行傳 二十三の二十三—三十三

第十三章 カイザリヤに於ける保羅 (紀元五十八年より六十年頃迄か)

(一) 保羅の幽閉

使徒行傳 二十三の三十一—三十五

(二) フェリクスの前に於ける保羅

保羅傳の引證

使 徒 行 傳 二十四の一―二十三

(三) ペリクス及デルシラと保羅

使 徒 行 傳 二十四の二十四―二十六

(四) カイザリヤに於ける獄中生活

使 徒 行 傳 二十三の三十四、三十五。二十四の二十二、二十三、二十五―二十七

(五) 保羅の審問

使 徒 行 傳 二十五の一―五

(六) 保羅の上告

使 徒 行 傳 二十五の六―十二。二十八の十七―十九

(七) 保羅とアグリッパ

使 徒 行 傳 二十五の十三。二十六の三十二

第十四章 カイザリヤより羅馬 (紀元六十年の秋より六十一年の春頃迄か)

(一) 保羅の一行クレテに往く

使 徒 行 傳 二十七の一―十三

(二) 海上の風浪

使 徒 行 傳 二十七の十四―三十八

(三) 破船と上陸

使 徒 行 傳 二十七の三十九―四十四

(四) マルタに於ける奇跡

使 徒 行 傳 二十八の一―十

(五) マルタより羅馬

使 徒 行 傳 二十八の十一―十六

第十四章 第一の羅馬幽囚 (紀元六十一年より六十二年迄か)

(一) 羅馬の教會と保羅

使 徒 行 傳 二十八の十三―十五

ローマ書 十六の三―十五

保羅傳の引證

- (二) 使徒行傳に於ける保羅の第一羅馬幽囚
使徒行傳 二十八の十六―三十一
- (三) 保羅は借家に住し兵卒に護衛せらる
使徒行傳 二十八の十六、三十、三十一
- (四) 書翰に於ける保羅の第一羅馬幽囚
ビレモン書 一、八、九
コロサイ書 四の三、十八
エペソ書 三の一。四の一。六の十八―二十
ビリビ書 一の七、十二―十四、十六
- (五) 解放に對する保羅の期待
ビレモン書 二十二
ビリビ書 一の二十三―二十七。二の二十四
- (六) テモテ
ビレモン書 一
コロサイ書 一の一

- ビリビ書 一の一。二の十九―二十三
- (七) エバフラス
ビレモン書 二十三
コロサイ書 一の三―八。四の十二―十三
- (八) オチシモとエバフラス
(オチシモは紀元六十一年か六十二年にビリビ書を送り届けしならん)
(エバフラスも紀元六十一年か六十二年頃コロサイ書エペソ書を送り届けしならん)
ビレモン書 十一―二十一
コロサイ書 四の七―九
エペソ書 六の二十一―二十二
(八) マコ、アリストアルコ、テマス、ルカ
ビレモン書 二十四
コロサイ書 四の十、十一、十四
- (九) エバフロデト
(エバフロデトはビリビ人の贈物を持ち來り紀元六十三年頃ビリビ書を送り届けたり)

ピリ ビ 書 二の二五—三十。四の十八、二十二

(十) 保羅の説教

ビレモン書 十

コロサイ書 一の二三—二十九。四の三、四

エペソ書 三の—九。六の十八—二十

ピリ ビ 書 一の七、十二—二十

(十一) 保羅の信仰と苦難の歡喜

コロサイ書 一の二十四

エペソ書 三の十三

ピリ ビ 書 一の十九—二十五、二十九、三十。二の十六—十八。三の四—十六、二十、二十

一。四の十一—十三

(十二) 教會に對する保羅の愛と注意

コロサイ書 一の—九。二の—五。四の十五—十七

エペソ書 一の十五、十六。三の十四—二十一

ピリ ビ 書 一の—十一、十七。二の十二、十六—十八。四の十、十四、十七

(十三) 猶太的基督者に對する保羅の警告

ピリ ビ 書 一の十五、十六。三の—三、十八、十九

第十五章 第一と第二羅馬幽囚の間に於ける保羅

(紀元六十三年より六十七年迄約四年か五年か)

(一) 保羅の説教及苦難

テモテ前書 一の—、十二—十六。二の七。四の十

テトス書 一の—三

(二) 保羅の同伴者

テモテ前書 一の—三

テトス書 一の四、五。三の十二、十三

テモテ後書 一の十六—十八。四の十、十三、十九、二十

(三) 保羅の反對者

テモテ前書 一の十九、二十

テモテ後書 二の一、十七、十八。四の十四、十五

保羅傳の引證

(四) 保羅が旅行せしならんと推測せる地方

ビリ ビ 書 一の二十六。二の二十四

(ビリビへ)

ビレモン 書 二十二

(コロサイへ)

コロサイ 書 四の十二、十七、九

(コロサイ教會との親交)

ビレモン 書 一、二、十、十一

同

コロサイ 書 二の一、四の十二、十三

(ラオデキヤとヒエラポリスへ)

コロサイ 書 四の十五

(ラオデキヤの教會との親交)

コロサイ 書 四の十六

(ラオデキヤ教會に對する保羅の手紙)

ローマ 書 十五の二十四、二十八

(スペインへ)

(五) 信するに足る保羅の旅行

テモテ前書 一の三。三の十四、十五

(保羅とテモテはエペソにありしならん又保羅はテモテ前書を六十七年頃書きしならん)

テトス 書 一の五 (保羅とテトス、クレテに往きしならん)

(六) ミレトスに於ける保羅

テモテ後書 四の二十 (保羅は六十七年頃テトス書を書しならん)

(七) トロアス

テモテ後書 四の十三

(八) コリント

テモテ後書 四の二十

(九) ニコポリスに於ける保羅

テトス 書 三の十二

第十六章 第二の羅馬幽囚 (紀元六十八年頃か)

(一) 保羅の投獄

テモテ後書 一の八。二の八、九

(二) 保羅の寂寞

テモテ後書 一の十五。四の十、十二、十九、二十

(三) 彼の同伴者

テモテ後書 一の十六―十八。四の十一、十九、二十一

保羅傳の引證

- (四) テモテ及マコと保羅
テモテ後書 一の三、四。四の九、十一、二十一
- (五) 保羅の要求
テモテ後書 四の十三
- (六) 保羅の審問
テモテ後書 四の十四―十八
- (七) 歡喜に満ちたる保羅の死に對する期待
テモテ後書 一の八―十二、二の八―十三、四の六―八

保羅が巡回せし地方

ア カ ヤ (希臘又はコリントを見よ)
 アムビボリス 使徒行傳十七の一
 アンテオケ(シリヤ) 同十一の二十六
 同十一の二十七―二十九
 同十二の二十五
 同十三の一―三
 同十四の二十六―二十八
 同十五の一―二
 同十五の三十一―三十五
 同十五の三十六―四十
 同十八の二十二、二十三
 同十三の十四―五十
 同十四の二十一

- アンテバトリス 同二十三の三十一
- アポロニア 同十七の一
- アツビーポロム 同廿八の十五
- アラビヤ ガラテヤ書一の十七
- アソス 使徒行傳二十の十三、十四
- アテンス 同十七の十五—三十四
- アタリヤ 同十四の二十五
- ベリア 同十七の十一—十四
- ピテニヤ 同十六の七
- カイザリヤ 同九の三十
- 同十八の二十二
- 同二十一の八—十四
- 同二十三の三十三。二十六の三十二
- 同十八の十八
- 同二十の十五

ケンクレヤ
キヨス

キリキヤ

クラウダ
クニドス
コロサイ?
コス
コリント

クレテ
クプロ

- 同二十二の三
- 同十五の四十一
- ガラテヤ書一の二十一
- 使徒行傳 二十七の十六
- 同二十七の七
- ビレモン書二十二
- 使徒行傳二十一の一
- 同十八の一—十八
- 同二十の二、三
- コリント後書 十三の二
- テモテ後書 四の二十
- 使徒行傳二十七の七—十三
- テトス書一の五
- 使徒行傳十三の四—十三
- 同二十一の三

保羅が巡回せし地方

ダマスコ

同二十七の四

同九の八、九

同九の十一、十九

同九の十九—二十二

ガラテヤ書一の十七

使徒行傳十四の二十、二十一

同十六の一

同十八の十九—二十一

同十九の一—四十一

テモテ前書一の三

テモテ後書一の十八

ガラテヤ書四の十三—十五?

使徒行傳十六の六

同十八の二十三

同二十の二、三

ガラテヤ

ギリシヤ

ヒエラポリス

コロサイ書四の十三

イコニオム

使徒行傳十三の五十一—十四の五

イルリコ

同十四の二十一—二十三

エルサレム

ローマ書十五の十九

使徒行傳二十六の四

同七の五十八

同八の一、二

同八の三

同九の一、二

同九の二十六—二十九

同十一の三十

同十二の二十五

同十五の四—二十九

同十八の二十二?

同二十一の十五、十六

- テオデキヤ?
- 同二十一の十七—二十三の三十一
- コロサイ書二の一
- 使徒行傳二十七の八
- 同十四の六
- ルカオニア
- 同二十七の五
- ルキヤ
- 同十四の六、八—二十
- ルステラ
- 同十四の二十一—二十三
- 同十六の一—三
- 同十六の十二
- マケドニア
- 同二十の一、二
- 同二十の三、六
- テモテ前書一の三
- 使徒行傳廿八の一—十
- 同二十の十五、十六
- 同二十の十七—三十八
- メリタ
- ミレトス

- ミテレネ
- ラ
- ミシヤ
- 同十六の七、八
- ネオボリス
- 同十六の十一
- テトス書三の十二
- 使徒行傳十三の十三
- 同十四の二十四
- ニコポリス
- 同十三の六—十二
- 同二十一の一、二
- 同十三の十三
- 同十四の二十五
- 同十五の三
- 同二十一の二
- 同二十七の十二
- パンフリヤ
- 同十三の十三
- バボス
- 同十三の六—十二
- 同二十一の一、二
- 同十三の十三
- 同十四の二十五
- 同十五の三
- 同二十一の二
- 同二十七の十二
- バタラ
- 同十三の十三
- 同十四の二十五
- 同十五の三
- 同二十一の二
- 同二十七の十二
- ベルゲ
- 同十三の十三
- 同十四の二十五
- 同十五の三
- 同二十一の二
- 同二十七の十二
- ビニケ
- 同十三の十三
- 同十四の二十五
- 同十五の三
- 同二十一の二
- 同二十七の十二
- ビニスク
- 同十三の十三
- 同十四の二十五
- 同十五の三
- 同二十一の二
- 同二十七の十二

保羅が巡回せし地方

同十六の十二—四十
 同二十の六
 ビリビ書一の二十六？
 使徒行傳十六の六
 同十八の二十三
 同十四の二十四
 同二十一の七
 同二十八の十三、十四
 同二十八の十三
 同二十一の一
 同二十八の十六—三十一
 テモテ後書一の十七
 使徒行傳十三の五
 同二十七の七、八
 同十五の三

サ モ ス
 同二十の十五
 サモトラケ
 同十六の十一
 セルキヤ
 同十三の四
 シ ド ン
 同二十七の三、四
 スペイン？
 ローマ書十五の二十四、二十八
 使徒行傳二十八の十二
 ス ラ ク サ
 同十五の四十一
 ス リ ヤ
 同十八の十八、二十二、二十三
 同二十一の三

タ ル ソ
 ガラテヤ書一の二十一
 使徒行傳二十二の三
 同九の三十
 同十一の二十五、二十六
 同二十七の八—十二
 同十七の一—九

保羅 巡回せし地方

- 三 館 同二十八の十五
- ト ロ ア ス 同十六の八―十一
- 同二十の六―十二
- コリント後書二の十二―十三
- テモテ後書四の十三
- 使徒行傳二十の十五
- 同二十一の三―六
- ト ロ グ リ オ ム
- ツ ロ

保羅と關係ありし人物

- ア カ イ コ コリント前書十六の十七
- ア ガ ボ 使徒行傳十一の二十八
- 同二十一の十、十一
- ア グ リ バ 同二十五の十三―二十六の三十二
- ア レ キ サ ン デ ル 同十九の三十三、三十四
- ア レ キ サ ン デ ル (銅 匠) テモテ前書一の二十
- テモテ後書四の十四、十五
- ア ン ピ リ ヤ ローマ書十六の八
- ア ナ ニ ヤ 使徒行傳九の十一―十九
- 同二十二の十二―十六
- 同二十三の二―五
- 同二十四の一
- ア ン デ ロ ニ コ ローマ書十六の七

保羅と關係ありし人物

ア ペ レ

同十六の十

ア ボ ロ

使徒行傳 十八の二十四—二十八

ア

テトス書三の十三

ア ビ ア

ビレモン書の二

ア ク イ ラ

使徒行傳十八の二、三

同十八の十八、十九

同十八の二十六

コリント前書十六の十九

ローマ書十六の三

テモテ後書四の十九

ビレモン書二

コロサイ書四の十七

コリント後書十一の三十二

使徒行傳十九の二十九

同二十の四

ア ル キ ボ

ア レ タ

ア リ ス タ ル コ

アリストビユラス

アルテマス

アスキリト

オーグスト

バリエス

バルナバ

同二十七の二

ビレモン書二十四

コロサイ書四の十

ローマ書十六の十

テスト書三の十二

ローマ書十六の十四

(カイザルの處も見よ)

(エリマヌを見よ)

使徒行傳九の二十七

同十一の二十二—二十五

同十一の二十六

同十一の三十

同十二の二十五

同十三の一—三

同十三の四—十四の二十八

- 同十五の一―三
- 同十五の十二
- 同十五の二十二
- 同十五の二十五、二十六
- 同十五の三十一―四十
- ガラテヤ書二の九―十
- 同二の十三
- コリント前書九の六
- コロサイ書四の十
- (ユダを看よ)
- 使徒行傳二十五の十三
- 同二十五の二十三
- 同二十六の三十
- 同十七の七
- 同二十五の八―十二

バルナバ
ベルニケ

カイザル

- 同二十五の二十一
- 同二十五の二十五
- 同二十六の三十二
- 同二十七の一
- 同二十七の二十四
- 同二十八の十九
- ピリビ書四の二十二
- テモテ後書四の十三
- (ペテロを看よ)
- コリント前書一の十一
- テモテ後書四の二十一
- (リシアスを看よ)
- 使徒行傳十一の二十八。十八の二
- ピリビ書四の三
- テモテ後書四の十

保羅と關係ありし人物

- クリスボ
- 使徒行傳十八の八
- ダマリス
- コリント前書一の十四
- 使徒行傳十七の三十四
- デマス
- ビレモン書二十四
- コロサイ書四の十四
- テモテ後書の十
- 使徒行傳十九の二十三―四十一
- 同十七の三十四
- デメテリヲ
- 同二十四の二十四
- デオメシオ
- 同十三の六―十二
- デルシラ
- ローマ書十六の五
- エリマス
- ピレモン書二十三
- エバイネト
- コロサイ書一の三一―八
- エバフロス
- 同四の十二、十三
- エプフロデス
- ピリピ書二の二十五―三十

- エラスト
- 同四の十八
- 使徒行傳十九の二十二
- テモテ後書四の二十
- エラスト(庫司)
- ローマ書十六の二十三
- ユブル
- テモテ後書四の二十一
- ユニケ
- 同一の五
- ユウオデヤ
- ピリピ書四の二
- 使徒行傳二十の九―十二
- ユテコ
- 同二十三の二十三―三十二
- 同二十三の三十三―三十五
- フエリクス
- 同二十四の一―二十三
- 同二十四の二十四、二十五
- 同二十四の二十六、二十七
- 同二十五の十四
- 同二十四の二十七
- フエスタス

保羅と關係ありし人物

- ユウリアス 使徒行傳二十七の一―二十八の十六
- ジュニヤ ローマ書十六の七
- ユスト 使徒行傳十八の七
- リナス テモテ後書四の二十一
- ロイス 同一の五
- ルキオ(クレチの) 使徒行傳十三の一、二
- ローマ書十六の二十一
- ルカ(我等なる語を用ひたる節)使徒行傳十六の十一―四十
- 同二十の五―三十八
- 同二十一の一、十八
- 同二十一の十九―二十六の三十二
- 同二十七の一―二十八の十六
- 同二十八の十七―三十一
- ピレモン書二十四
- コロサイ書四の十四

ル デ ヤ

テモテ後書四の十一

使徒行傳十六の十四、十五

同十六の四十

ルシアス (千人の隊長)

同二十一の三十一―三十九

同二十二の二十四―二十九

同二十二の三十

同二十三の十一―三十

同二十四の七

同二十四の二十二

同十三の一、二

同十二の二十五

同十三の五

同十三の十三

同十五の三十六―三十九

ピレモン書二十四

マ コ

保羅と關係ありし人物

マ	マリヤ	コロサイ書四の十
ナ	ナツン	テモテ後書四の十一
ナ	ナルキツ	ローマ書十六の六
ネ	ネリオ	使徒行傳二十一の十六
メ	メンバス	ローマ書十六の十一
オ	オルンバ	同十六の十五
オ	オネシモ	コロサイ書四の十五
オ	オチンポロ	ローマ書十六の十五
		ビレモン書十一二十一
		コロサイ書四の九
		テモテ後書一の十八
		同四の十九
バ	バトロバ	ローマ書十六の十四
ベ	ベルシイ	同十六の十二
ペ	ペテロ (シモン)	ガラテヤ書一の十八

フ	フイベ	同二の七—十
ビ	ビレモン	同二の十一—十四
		使徒行傳十五の七—十一
		同十五の十四
		ローマ書十六の一、二
		ビレモン書十一—二十一
		同一
ピ	ピレト	テモテ後書二の十七
ピ	ピリボ (傳道者)	使徒行傳二十一の八—十
ビ	ビロロコ	ローマ書十六の十五
ビ	ビリゴン	同十六の十四
フ	フゲロ	テモテ後書一の十五
		ホルシアスフェスタス(フェスタスを見よ)
		使徒行傳十八の二、三
		同十八の十八、十九
		プリスキラ

保羅と關係ありし人物

同十八の二十六
 コリント前書十六の十九
 ローマ書十六の三
 テモテ後書四の十九
 使徒行傳二十八の七、八
 テモテ後書四の二十一
 (ツバテルを看よ)
 ローマ書十六の二十三
 同十六の十三
 使徒行傳十九の十四
 同二十の四
 同十三の七—十二
 同十五の二十二
 同十五の二十七
 同十五の三十二—三十四

同十五の四十一—四十一
 同十六の一—四十
 同十七の一—九
 テサロニケ前書一の一
 使徒行傳十七の十一—十三
 同十七の十四、十五
 同十八の五
 テサロニケ前後書一の一
 コリント後書一の十九
 (シラスを看よ)
 (ペテロを看よ)
 使徒行傳十三の一、二
 同二十の四
 同十八の十七
 コリント前書一の一

ス タ ク

ローマ書十六の九

ス テ バ ナ

コリント前書一の十六

ス テ バ ノ

同十六の十五、十七

ス ト ケ

使徒行傳七の五十七、五十八

テ リ テ オ

同八の一、二

テ ル ト ル ス

ピリピ書四の二

テ モ テ

同四の三

テ

ローマ書十六の二十二

テ

使徒行傳二十四の一―九

テ

同十六の一―四十

テ

テサロニカ前書一の

テ

使徒行傳十七の十四

テ

同十八の五

テ

テサロニカ前書一の

テ

同三の六

テサロニカ後書の一の一

コリント後書一の十九

使徒行傳十九の二十二

コリント前書四の十七

同十六の十、十一

コリント後書一の

ローマ書十六の二十一

使徒行傳二十の四

ピレモン書一

コロサイ書一の

ピリピ書一の

同二の十九―二十三

テモテ前書一の三

同三の十四、十五

テモテ後書一の十八

テ ト ス

- 同一の三、四
- 同四の九、十一、二十一
- ガラテヤ書二の一
- 同二の三―五
- コリント後書十二の十七、十八
- 同七の十三―十五
- 同八の六
- 同二の十二、十三
- 同七の五―七、十三―十六
- 同八の六―八、十六―二十四
- 同九の一―五
- テトス書一の五
- テモテ後書四の十
- 使徒行傳二十の四
- 同二十一の二十

トロピモ (エベソ人)

ト ロ ビ モ
テ ル バ イ ナ
テ ル ボ ザ
テ キ コ

- テモテ後書四の二十
- 同四の二十
- ローマ書十六の十二
- 同十六の十二
- 使徒行傳二十の四
- コロサイ書四の七―九
- エベソ書六の二十一、二十二
- テトス書三の十二
- テモテ後書四の十二
- 使徒行傳十九の九
- ローマ書十六の九
- テトス書三の十二

テ ラ ノ ス
ウ ル バ ノ
ゼ ナ ス

(以上保羅傳の引證、保羅が巡回せし地方及保羅に關係ありし人物はグロドウキンの著書に由つたのである)

保羅傳の附録 終

保羅と關係ありし人物

著者の参考書

附
録

- Carl Von Weizsacker, Apostolic Age.
- A. C. McGiffert, Apostolic Age.
- A. E. Garvie, Studies of Paul and His Gospel.
- Paul Wernle, Beginnings of Christianity.
- Adolf Deissmann, St. Paul, A Study in Social and Religious History.
- F. W. Farrar, The Life and Work of St. Paul.
- F. J. Goodwin, A Harmony of the Life of St. Paul.
- Prof. Ramsay, The Church in the Roman Empire, and St. Paul, The Traveller and the Roman Citizen.
- Adolf Harnack, Expansion of Christianity.
- G. B. Stevens, The Apostle Paul.
- G. B. Stevens, New Testament Theology.
- A. B. Bruce, St. Paul's Conception of Christianity.
- Lightfoot on Phillipians.
- Meyer's Commentary.

五十八

製 複 許 不

印刷者 東京市京橋區銀座四丁目一番地 金井重雄 印刷所 東京市京橋區銀座四丁目一番地 發行所 東京市京橋區銀座四丁目一番地 教文館	大正二年十二月十一日印刷 大正二年十二月廿一日發行	著者 松永文雄 發行者 基督教興文協會 代表者 東京府下大久保百人町三百三十四番地 エス、エツチ、ウエンライト
---	------------------------------	--

324
368

終